

げんでん ふれあい 福井

2011 SPRING 第39号



第12回げんでんふるさと文化賞
および芸術新人賞受賞者インタビュー

若狭の歴史と人物「守護武田氏と木下長嘯子(一)」

ふるさと福井「食育の祖 石塚 左玄(五)」

三月



財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的にしています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にした広報誌を目指します。

第12回 (平成22年度) げんでん

芸術新人賞 ふるさと文化賞

岩永さん(絵画造形)・松村さん(地域文化活動)・島崎さん(邦楽)

塩谷さん(俳句)



第12回 げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞および
第13回 ふるさと大賞写真コンテスト入賞者の表彰式
(2月7日 日本原電敦賀地区本部)



松村忠紀さん
<坂井市>

多くの絵画、彫刻、壺等が所狭しと飾られている三国町安島、大湊神社の自宅兼社務所に松村さんを訪ねました。松村さんは大湊神社、宮司の傍ら「みくに歴史を生かすまちづくり推進協議会」の初代会長を10年間勤めて地元三部会議室(敦賀市本町2丁目)で行いました。加藤理事長から受賞者一人ひとりに賞状、賞金、顕彰楯を贈り栄誉をたたえました。

今回受賞された5名の方々に受賞の感想や今後の抱負をお聞きしました。

「活動の基盤は、自分の足元に良いものがあることに気が付く事。歴史ある町並み、路地、家屋等は現在の自分達だけでなく、将

現在86歳の年齢を数えながら、今日も現役画家として100号の大作を描いている松宮さんを若狭町の自宅に訪ねました。

教員時代の絵画教育について伺うと小学生には子供が感じた事、おもしろさを中心に、中学生にはデッサンを中心教えてきました。特に大切な事は生徒の自由な発想を大切にすることです」と生徒自身の感受性を尊重す

自分の足元に良いものがある

来年の子供達に愛着、誇りを持つて残すべきであると思う」と話し、人生への信条については、「日々を汗を流し生きぬくことの幸せです。即ち現代を背負って今日から明日の未知の世界に向つて生きることで、むづかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろたのしく人生を歩む」と話して下さいました。

子供の自由な発想大切に

CONTENTS — 39

- 第12回 げんでんふるさと文化賞および芸術新人賞受賞者インタビュー 2
- 若狭の歴史と人物 「守護武田氏と木下長嶌子(一)」 4
- ふるさと福井・人物シリーズ 「食育の祖 石塚左玄(五)」 6
- 第13回 ふるさと大賞 写真コンテスト 8
- ふくいの伝統行事シリーズ 「日向の水中綱引き」 10
- 敦賀市立博物館誌上ギャラリー／33 11
- 福井の文学碑 「山の文学者 深田久弥」 12
- 福井の民俗文化 シリーズ4 「敦賀市山の初午祭り」 13
- 情報ファイル 14

FRONT COVER



「日向の水中綱引き」

〈美浜町〉

国選択
無形民俗文化財

毎年小正月に行われる恒例の美浜町日向の水中綱引きは、国選択の無形民俗文化財として名高い。大蛇をかたどった蔓綱を運河に張り、東西に分かれ力強く水中で引き合う。海神族の神話の里にふさわしい勇壮な民俗行事です。今年は荒天になり、時折吹雪が舞う中、両岸の観客の声援にこたえ、10分ばかりでみごとに太綱が切れて、怒濤の海へと厄を払うように流されました。若狭地方には綱引きや勘詠吊しなどの年頭の蔓綱の行事があり、水中綱引きも本来は年占の神事と考えられます。唐津市波戸で真夏に海中の盆綱引きが行われますが、寒中の水中綱引きは全国でも当地のみ。(現在は第3日曜日に変更)

る点を力説していました。また、「自分は校長の職にあつた6年間も美術教師として教壇に立ち、今でもかつての教え子から「校長先生から美術を習つた事を覚えている」とよく聞かしそうに話していました。



松宮昂さん
<若狭町>

「言われる。」

と述べ生涯美

術教師であつ

た事を覚えて

いる」とよく

話をしました。

現在も請われて地元で絵画教室を開催

しているほか、恒例の年末チャリティ

アート展に常連として出展し、旺盛な

創作活動を続けています。

芸事は継続していく事が大事

今回、女性で初めてとなる俳句での文化賞受賞者となつた塙谷さんに俳句への思いをお聞きしました。「40歳を過ぎた頃、牧田先生に出合い勉強するようになりました。子供の受験勉強と一緒に俳句の勉強をやつた事が懐かしいです。」と話し「芸事は継続してい

ます」と述べています。塙谷さんは俳句雑誌「幹」の事務局として世話を永年勤めているほか、県下俳句愛好家の約7割を女性が占めると言わわれている現在、「女性俳句大会」と言われている現在、「女性俳句大会」の指導に特に力を入れています。塙谷さんは「仲間の皆さんと俳句の批評性を高められるよう徹底した議論を尽すほか、全国レベルの句会にも挑戦していきたいです。」と抱負を話して下さいました。

自分のテーマ「命」を描き続けたい

絵画の分野で鉛筆画を専門に数々の展示会で活躍している岩永さんに受賞の感想をお聞きしました。「非常にありがとうございました。自分なりに感想をお聞きになります。これ

松村忠記さん
(地域文化活動)

坂井市(74才)

福井市美術館初代館長を11年務め、平成20年3月勇退するまで現代的な展示に挑み、ユニークな企画を展開し人気を呼びました。

平成13年に発足した「みくに歴史を生かすまちづくり推進協議会」として、平成20年には雄島の人間国宝・竹本駒之助氏を招いて人形淨瑠璃「道行初音旅」を成功させ地域活性化に寄与しました。

松原昂さん
(繪画造形)

若狭町(86才)

昭和20年より県内の小・中学校に勤務、昭和60年瓜生小学校長を最後に退職。昭和61年より平成6年まで旧上中町教育委員、教育委員長を務めました。昭和3年の口選に初入選以来、今日まで21回入選。

平成7年には福井県文化賞、平成12年には文部大臣表彰を受賞しました。福井県総合美術展の審査委員として永年勤め、福井県の芸術文化向上に尽力したほか、県南の年末チャリティアート展にも積極的に参

塙谷美津子さん
(俳句)

福井市(76才)

俳句を牧田雨煙樹氏に師事。県下女性俳句の第一人者で、これまで福井県俳句大会で福井県知事賞を何度も受賞しているほか、平成元年には第一回北陸現代俳句の最高峰賞を受賞。平成17年には第20回国民文化祭文化芸術賞受賞。県下俳句人の約7割を女性が占めると言わわれている現在、「女性俳句大会」の指導に当たり

岩永純さん
(繪画造形)

福井市(44才)

平成11年県美展で知事賞を受賞後、知事賞、教育委員会賞を連続受賞し、平成13年に無鑑査に推挙される。平成15年には第20回PANDOR Aのメンバーとともに精力的に活動していました。

岩永純さんは音楽教師で音楽に親しむ

島寄佐知恵さん
(邦楽)

福井市(48才)

第曲の免状取得後、地元福井において数多くの演奏会に出演するほか、平成15年に結成された邦楽ユニットPANDORAのメンバーとして活躍し、Jエサムホール展において「奇形」で大賞受賞。イメージの創造性と独創的に満ちた作品であると高い評価を受けました。また平成14年、16年に北陸中日美術展に入選。平成17年には第7回フィレンツェ美展ヒンキ賞を受賞し、フィレンツェへ短期留学するほか、精力的な創作活動を続け、今後の活躍が期待されます。

島寄佐知恵さんは音楽教師で音楽に親しむ

く事が一番重要だと思ひます。今回の受賞は俳句をやつている女性の代表としていたいたものと大変嬉しい思いをしていました。」と素直に話して下さいました。

塙谷さんは俳句雑誌「幹」の事務局として世話を永年勤めているほか、県下俳句愛好家の約7割を女性が占めると言わわれている現在、「女性俳句大会」と言われている現在、「女性俳句大会」の指導に特に力を入れています。塙谷さんは「仲間の皆さんと俳句の批評性を高められるよう徹底した議論を尽すほか、全国レベルの句会にも挑戦していきたいです。」と抱負を話して下さいました。

を機にもつと頑張らなければ自分を鼓舞しました。今後とも自分のテーマである「命」を描き続けたいです。」と受賞の喜びを話して下さいました。

受賞の喜びを話して下さいました。塙谷さんは「仲間の皆さんと一緒に文化の魅力についてお聞きすると「一本一本の線の積み重ねで創作するもので、油絵のような偶然性や、厚く塗り重ねるような表現はできない。そこが難しくもあり面白い。」と話し、愛用しているHからBまでの鉛筆を見せてくれました。福井の文化継承について伺うと「伝統文化や芸術を身近なものに感じる心情を育てる必要があります。学校教育がかなりのウェイトで役割を担っていますが、地域や家庭での取り組みも大切だと感じています。」と話して下さいました。

機会は多くありました。琴との出会いは遅く、嫁ぎ先の母親がたまたま琴の先生だった事から箏曲への道に進む事になりました。」と話す島寄さん。今回の受賞についてお聞きしますと「人ととの繋がりの不思議さを感じます。東京の琴の先生、嫁ぎ先の母親、同僚の皆さんに感謝します。夢をやつしている人達の皆さんに感謝します。夢をやつす。夢をやつ励みになれば

嬉しいです。」と笑顔で話して下さいました。今後の抱負については「今後とも小中学校への訪問邦楽鑑賞会を開け、幼・保園児を対象とする邦楽体験コンサートも充実させるほか、自身としては真摯に美しい音、良い音を追求し、人に感動を与えるような演奏をしたい。邦楽ユニットPANDORAのメンバーとともに精力的に活動していくことを願っています。」と明るく話して下さいました。



塙谷美津子さん
<福井市>

「私は「仲間の

皆さんと俳句

の批評性を高められるよう徹底した議

論を尽すほか、全国レベルの句会に

も挑戦していきたいです。」と抱負を

話して下さいました。



岩永純さん
<福井市>

「岩永純さんは「仲間の

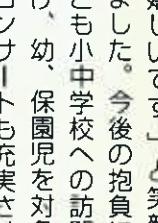
皆さんと俳句

の批評性を高められるよう徹底した議

論を尽すほか、全国レベルの句会に

も挑戦していきたいです。」と抱負を

話して下さいました。



島寄佐知恵さん
<福井市>

「島寄佐知恵さんは「仲間の

皆さんと俳句

の批評性を高められるよう徹底した議

論を尽すほか、全国レベルの句会に

も挑戦していきたいです。」と抱負を

話して下さいました。

ふるさと文化賞

げんでん

松村忠記さん(地域文化活動) 坂井市(74才)
福井市美術館初代館長を11年務め、平成20年3月勇退するまで現代的な展示に挑み、ユニークな企画を展開し人気を呼びました。

塙谷昂さん(繪画造形) 若狭町(86才)
昭和20年より県内の小・中学校に勤務、昭和60年瓜生小学校長を最後に退職。昭和61年より平成6年まで旧上中町教育委員、教育委員長を務めました。昭和3年の口選に初入選以来、今日まで21回入選。

岩永純さん(俳句) 福井市(76才)
俳句を牧田雨煙樹氏に師事。県下女性俳句の第一人者で、これまで福井県俳句大会で福井県知事賞を何度も受賞しているほか、平成元年には第一回北陸現代俳句の最高峰賞を受賞。平成17年には第20回国民文化祭文化芸術賞受賞。県下俳句人の約7割を女性が占めると言わわれている現在、「女性俳句大会」と言われている現在、「女性俳句大会」の指導に特に力を入れています。塙谷さんは「仲間の皆さんと俳句

島寄佐知恵さん(邦楽) 福井市(48才)
第曲の免状取得後、地元福井において数多くの演奏会に出演するほか、平成15年に結成された邦楽ユニットPANDORAのメンバーとして活躍し、Jエサムホール展において「奇形」で大賞受賞。イメージの創造性と独創的に満ちた作品であると高い評価を受けました。また平成14年、16年に北陸中日美術展に入選。平成17年には第7回フィレンツェ美展ヒンキ賞を受賞し、フィレンツェへ短期留学するほか、精力的な創作活動を続け、今後の活躍が期待されます。

芸術新人賞
げんでん

守護武田氏と木下長嘯子（一）

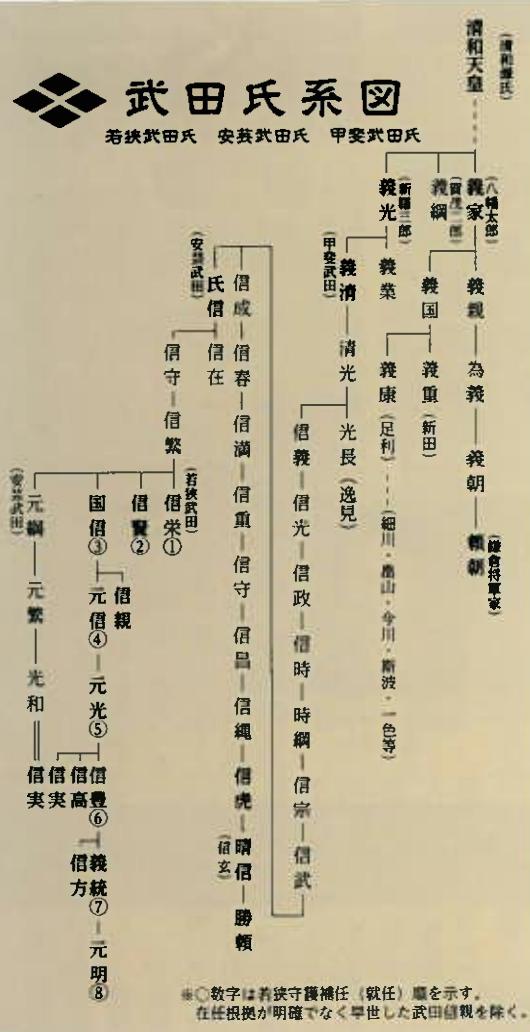
戦国期若狭で文化の華を咲かせた守護

今年は、NHKの大河ドラマに「お江」が放送されます。なかでも「お初」は小浜市に、お市の方は福井市にゆかりが深い。そこで小浜市史の事務局を務めた杉本泰俊さんに、三姉妹も含めて、中世から近代にかけて若狭で活躍した人物を中心に「若狭の歴史と人物」と題して四回に分けて執筆をお願いしました。

謀殺し、その功により若狭の守護に任命され、その後武田氏は信賢・国信・元信・元光・信豊・義統・元明と8代におよび若狭を支配することとなりました。

かし、苛酷な領内への段錢賦課などて文亀2年（1502年）国人・百姓らが小兵を襲い、一族が殺される事件も起きました。

守護武田氏



武田系図「小浜市史」通史編より（資料提供 小浜市）

領国支配の安定を求める
武田氏にとって、小浜を統治することは重要な政治課題の一つでした。小浜は日本海交易の中心であると共に、武田氏領国における政治・経済・文化の中心地でもありました。

しかし、元光は、大永7年（1527年）、京都西七条川勝寺の合戦で大敗し

戦国大名としての成長は挫折しましてが、他面栗屋・寺井・内藤らの有力家臣をも含め歴代文化的な素養が高く、当代随一の学者三条西実隆らと交わって古典の学問・歌道・書道などにすぐれ、しばしば後瀬山では連歌会を催され、宗祇・宗長・紹巴など一流の連歌師も小浜を訪れました。

晩年には重臣栗屋元隆が背き、信豊も天文11年（1542年）河内の戦いに敗れて元信以来の丹後侵攻でも苦戦が続いて次第に衰え、子の義統とも対立しました。その後武田義統・元明の頃には、家臣団の統制もきかず、小浜を攻めた越前守護朝倉氏が元明を越前へ連れ帰る始末で、ついに武田氏は滅亡しました。

を継いだ元光は、やがて大永2年（1522年）、小浜を見渡す後瀬山に築城（国史跡指定）して山麓に館舎を構えました。家臣団は、元光以後、領国内の要所にそれぞれ山城を築いて配置され、それぞれの領域を知行するとともに、奉行人あるいは奏者として隨時後瀬山城に出仕して施政に参画し、築城と同時に家臣団の屋敷（社寺）を守護館周辺に配置し、当主の命に従うような体制に移行していくと思われます。元光のころには、守護が常時在国することになり、小浜は漢律として発展し、若狭支配の中心都市として守護館を中心的に防備をそなえ、また守護大名の城下町の体裁

天文11年（1542年）河内の戦いに敗れて元信以来の丹後侵攻でも苦戦が続いて次第に衰え、子の義統とも対立しました。その後武田義統・元明の頃



後瀬山城跡（資料提供 小湊市）

卷之二十一



杉本 泰俊 氏
Taisyun Sugimoto

1949年(昭和24年)10月、福井県生まれ。高野山大学仏教学部卒業。小浜市に奉職。世界遺産推進室長、小浜市立図書館長などを歴任。2010年3月に退任した。これまで小浜市史の編纂に携わったほか、福井県史の調査執筆員を勤める。著書には「若狭の古寺美術」のほか、小浜市、ならびに小浜市議会が発行した「御食国」「小浜市議会史」の編集・編纂に当たった。1990年より高浜町中山寺住職、2010年5月より京都仁和寺総務部長。



武田元光肖像 発心寺蔵（資料提供 小浜市）

八秀吉公ノ妻ノ兄、實ハ松ノ丸殿ノ子
ニテ父ハ武田孫ハ
郎元明ノ子ト云説
アリ、松ノ丸殿勝
俊ヲ若狭ニ隠シ置、
後ニ政所ヲ頼秀吉

公工文禄一年ヨリ
勝俊若狭主トナシ
玉フ、但若州大飯
郡ニテ二万石ハ勝
俊ノ弟木下宮内少輔利房ニ賜テ、居城
高浜也、勝俊ノ居城ハ小浜也」と、さ

は再建して菩提所とした神宗寺院が数
多く、一族からは月甫清光・潤甫周玉・
英甫永雄ら五山の高僧を輩出しました。
また、能楽など領内の芸能も保護して
八幡神社では流鏑馬や放生会も行われ
ていました。

木下勝俊（木下長嘯子）の出自

武田氏のあと小浜に在城したのが木
下勝俊であります。勝俊・利房の兄
弟の出生については、木下家定の嫡子
との説もありますが、筆者は勝俊を永
禄12年（1569年）、元明が18歳の
とき、京極高次の妹電子との間に生ま
れた子とし、元明死去までの12年間、
童子が兄弟二人と女一人を育てたと考
えました。父元明は、天正10年（15
82年）信長に滅ぼされ、兄弟二人
は『武田永禄記』によれば、「是は武
田孫八郎元明の子息なり、室松の丸
殿、秀吉公の連中を頼み奉公させ、終
若狭の主となり。二万石は勝俊、弟木
下宮内少輔利房給ふ。高浜逸見跡城に
住す」とあり、また「若狭国伝記」に

は木下勝俊と利房であるとし、兄弟は、
父元明が天正10年（1582年）信長
に滅ぼされたのち、母（松の丸殿）と
北政所の計らいにより、13歳で豊臣秀
吉の妻ねね（北政所）の兄木下家定の
養子とし、秀吉の小姓となつて若狭を
領することになったものと考えました。

一方、勝俊を元明と伊賀守晴貞の娘
との間に生まれた子であるともいい、
さらに、勝俊は、天正元年（1573
年）4歳で豊臣秀吉の妻ねね（北の政
所）の兄、木下家定の養子となり木下
の姓を継いだとあります。元明の子
ならば父存命中であり、木下家定の養
子になることはないと思われます。

いずれにしても、木下勝俊と利房の
若狭領知については、文禄3年（15
94年）の「伏見普請役之帳」に、「六

万二千石 羽柴若狭（木下勝俊）少将
二万石 木下宮内（利房）とみえる
ところから、おそらく浅野長吉の甲斐
転封と同時期の文禄2年（1593
年）に、それぞれ勝俊が小浜6万2千
石を、利房が高浜2万石を領地しまし
た。

翌年、秀吉は、側室の京極電子を大

坂城西丸に移し西丸殿と名乗らせる
とともに、奉行石田三成などの五奉行が
小浜組屋甚四郎に呂宋壱七箇の請負売
却代金を渡しているが、これも領主木
下勝俊をしての買付けであります。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の
戦いで、徳川家康は、木下勝俊に伏見
城の松丸殿の守備を命じました。しかし
勝俊は、義弟の秀秋（小早川秀秋）
の攻撃を受けて伏見城を抜け出したこ
とから、勝俊は所領を没収されました。
さらに厳しい処罰も予想されましたが、

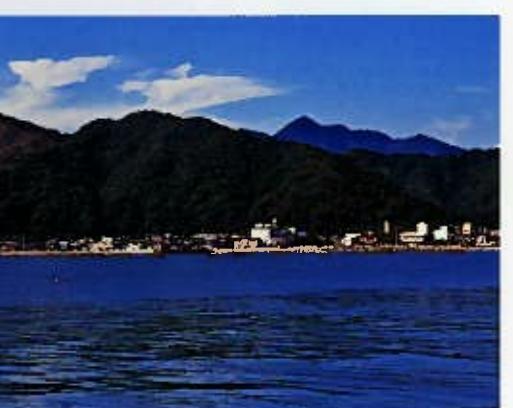
北の政所が家康にとりなして改易にと
どまりました。高浜城主利房も西軍に
属して改易されました。

その後、勝俊は政治の舞台から退き、

京都東山北の政所を頼つて高台寺で隠
棲しました。長嘯子と名乗り、隠棲中
は、茶を千利休から習い、利休が創意
の草庵風茶室を好んで高台寺内に時雨
亭茶室を建て、また細川幽斎や林羅山
とも交流して和歌をたしなみ、「挙白
集」を編んで、近世和歌の大家として
大成し、慶安2年（1649年）80歳
で亡くなりました。

また弟利房は、のち慶長20年（16
15年）大坂の陣で徳川方に加わり戦
功を立てたため、元和元年（1615
年）木下家定（養父）の遺領二万五
千石を与えられ、備中国足守に陣屋を
構え、子孫は代々足守藩主として江戸
時代を生き抜きました。

また、江戸初期の敦賀の豪商で、敦
賀代官であった打它家の初代示貞の子
公軌は、京都で大名貸しを営むかたわ
ら、歌人である木下長嘯子（勝俊）を
後援して、その歌集『挙白集』の刊行
を助け、また『古今類句』の編纂を手
掛けました。さらに能書家でもあり、
藤原惺窓の『惺窓文集』一〇巻のため
に筆をふいました。このように隠棲
した長嘯子は、小浜を懐かしんで詠ん
て次のような和歌を残しています。



後瀬山全景（資料提供 小浜市）

後瀬山此里に

すみ始めしころにや、

椎ひろひにとなれてこそ、

教育の祖 石塚左玄

左玄の訓え ①食は家庭教育なり ②命は食にあり 食養道

文 岩佐勢市



岩佐 勢市氏
Seiichi Iwasa

1949年福井市に生まれる。鳥取大学卒業。JA経済連・JA厚生連に奉職。前JA福井県厚生連理事長。職務の関係から住民健康管理のうえで、特に子供の食育に注目。現代の子供達の食生活の乱れを憂う。自らもスローフードの研鑽ならびに、福井市生まれで食育の祖と言われる石塚左玄の研究を進め、業績の紹介とともに、食育の重要性の啓蒙と、食と運動による健康づくりを提案している。石塚左玄の業績に詳しい。

教育の言葉を 初めて本に

石塚左玄は1896（明治29）年に上梓した「化学的食養長寿論」の中で「教育と言ふ言葉を日本で初めて活字にして用いました。また左玄は「学童を有する民は家訓を厳にして……躰育、智育、才育は即ち教育なりと觀念せざるべけんや」「之を約言すれば躰育、智育、才育は即ち教育なり」と子供にとって一番大事な教育は教育であると教育の重要性を本の中で初めて説いたので、教育の祖と呼ばれています。

教育と五育

当時は五育と言われる智育、才育、德育、躰育、教育の五つの教育があり（現代教育の3本柱は德育、知育、体育でイギリスのハーバート・スペン

サード1820～1903年の三育主義に由来しており、左玄はそれを参考にした事が推定される。）の中でも教育は全ての教育の根幹で基礎となるもので、教育の中で最優先されるべき教育は家庭でしっかりと行われる事が大

事と書きました。学校のテストや通信簿の成績に一喜一憂する親は多くても、同じくらいに教育について十分に考え実践している家庭は多くはないと思われます。最悪の例は道徳も教育も家庭でなくして学校が教えるものと勘違いをしている大人も存在します。

もっとも大人自身が正しい食生活を送っている人が実態です。食生活が原因と思われる糖尿病を始めとする最近の生活習慣病の増加を見ると、大人自身の食生活を見直す事が第一です。親が間違った食生活を行なつていてはとても親が子供を食育することは出来ません。

朝食の欠食

朝食を食べない子供について教育関係者からも影響を心配する深刻な声が聞かれます。

小中学生で朝食の欠食率は男女とも

6%台あり、高校生では男児が13.4%、女学生で11.5%が朝食を食

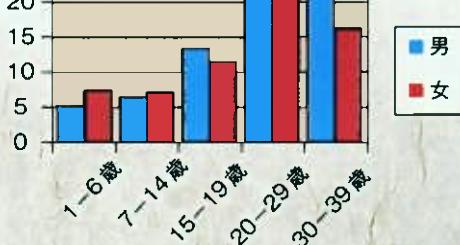
べていない状況となっています。しかし子供たちが朝食を食べないのは決して子供が悪いのではなくて、全ての責任は親にあります。実際に親が親としての義務と責任を全うしていないからです。

任は親にあります。実際に親が親としての義務と責任を全うしていないからです。

青春時代で心身ともに大きく成長発展する将来への可能性を蝕んでいる事は彼らにとっては悲劇そのもので、親はどうに考えていいのでしょうか？

そして驚くべき事は20代・30代の男性で30%の欠食率で約3人に一人が朝

朝食の欠食率
H19厚労省調査から



食べず、朝食欠食率は非常に高く、さらに若い人の野菜の摂取量等栄養バランスも深刻な現実となっています。子供の食も一日の摂取カロリーは脂質・油脂類を中心として十分すぎるほど過食であふれ、その上植物繊維やミネラル・ビタミン類不足と栄養の偏りがあり、食生活全般について親の無

10歳児瘦せの推移割合 (表1)

	男女	男	女
S52	1.0%	1.0%	1.1%
H17	3.1%	3.4%	2.7%

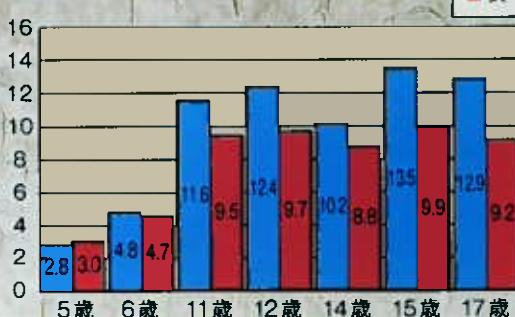
(平成17年度学校保健統計調査)
10歳で平均体重の80%以下

和52年に比較して率は3倍になっています。増加率は肥満の同じ比率より遙かに高い数字で、要するに肥満も多く又痩せの子供たちも激増しているのです。これらの事からも子供たちの食生活の乱れが見えてきます。子供の食は家庭ばかりで食べる個食、一人ぼっちで食べる孤食、決まった物しか食べない固食と言われるほどに、家族の絆を創るべき食は深刻な状況です。

戦後の子供の体格は以前と比較して大きく改善され、それには洋風化された食生活改善と栄養等が貢献をしているのは間違いない事実です。ところが今では栄養過多と運動不足で子供にも肥満が見られ生活习惯病の若年化に拍車がかかっています。

図からは小中学生・高校生の10%を越す子供が肥満となっている状況が伺われます。その現代食は飽食と呼ばれています。

子供の肥満
(文部科学省 H19 学校保健統計調査から作成)



肥満は確実に増加していますが、表1は肥満の逆の痩せの推移です。平成17年の痩せの割合は3.1%と肥満と比較して多くはありませんが、しかし昭和52年に比較して率は3倍になっています。増加率は肥満の同じ比率より遙かに高い数字で、要するに肥満も多く又痩せの子供たちも激増しているのです。これらの事からも子供たちの食生活の乱れが見えてきます。子供の食は家庭ばかりで食べる個食、一人ぼっちで食べる孤食、決まった物しか食べない固食と言われるほどに、家族の絆を創るべき食は深刻な状況です。

責任者が伺われます。

戦後の子供の体格は以前と比較して大きく改善され、それには洋風化された食生活改善と栄養等が貢献をしているのは間違いない事実です。ところが今では栄養過多と運動不足で子供にも肥満が見られ生活习惯病の若年化に拍車がかかっています。

図からは小中学生・高校生の10%を越す子供が肥満となっている状況が伺われます。その現代食は飽食と呼ばれます。

食が命を作る。 食養道

石塚左玄が唱えた食と健康の繋がりを最も的確に表現している文の一つで「化学的食養長寿論」の最初のくだり

に「『能く人を生ずるものにして、即ち能く人を長大し、能く人を矮小し、能く人を肥厚し、能く人を瘦減して、能く人を健にし弱にし、能く人を勇にし怯にし、能く人を智にし才にし、能く人を寿にし天にするのみならず、能く人の心を軟化にして高尚に静肅に温

和に優美に、能く人の心を硬化して野卑に喧嘩に強情に卑劣に為すや無論なりとす。」

とあります。食が人の身体をつくり、人の健康を左右し、人を賢くし、人の長寿を決め、人の心と性格の良し悪しに影響を与えると食と人の関係をこれ以上に語っている文章は他に無いと言つても過言ではありません。さらに続けて「物不得平則鳴、食不得平則病」、「物の平衡がくずれると声を出して鳴き、食の平衡がくずれると病気になります」と左玄は言っています。つまり食が人の心、身体と健康を作り、命は食にあると語ります。この事が左玄の提唱した日本人の「道」であり食養道は大変大事なものであり、左玄が考えた食養道実践は食べる人の体格、人格、住んでいる場所、天候、採れる食物の種類等で千差万別の手法があり、要するに「郷に入りては郷にしたがう」事が正しい食生活という事です。

私たちの毎日食べる食は、私たちが身体を動かす時に使われるエネルギーです。1937年、ドイツ人ルドルフ・シェーンハイマーが、「毎日我々が食べている食物は、日々身体に置き換わって、分子レベルでは生命は変化し続けている。つまり生きていると言ふ事は、生命が食べ続けることと同じであり、生命体自身の物質が流れ続けている、シェーンハイマーは「其の流れを止めない為に食べ続けているのであり、生きているということは流れそのもの」であることを発見しました。体内では常に変化しながらも外観からは安定した状況でこれを動的平衡と名付けたのです。(福岡伸一先生から)左玄の「命は食なり・食が命を作る」とは正しくこの事です。

左玄の食養道と 動的平衡

私たちの毎日食べる食は、私たちが身体を動かす時に使われるエネルギーです。1937年、ドイツ人ルドルフ・シェーンハイマーが、「毎日我々が食べている食物は、日々身体に置き換わって、分子レベルでは生命は変化し続けている。つまり生きていると言ふ事は、生命が食べ続けることと同じであり、生命体自身の物質が流れ続けている、シェーンハイマーは「其の流れを止めない為に食べ続けているのであり、生きているということは流れそのもの」であることを発見しました。体内では常に変化しながらも外観からは安定した状況でこれを動的平衡と名付けたのです。(福岡伸一先生から)左玄の「命は食なり・食が命を作る」とは正しくこの事です。



化学的食養長寿論

テーマ

ふるさとの味わい・ ふくいの食



「雪割りて」

深々と雪の積もった勝山水菜の収穫作業風景が、うまく「ふるさと」と結びつき素晴らしい写真に仕上がっています。後方には百名山で有名な荒島岳がそびえ、雪深い奥越の情景に溢れています。勝山水菜は雪の多い寒い時期に収穫するので大変と聞いていましたが、「ふるさとの味わい・ふくいの食」を見事に、そして的確に表現されており、また写真に動きもあり、画面の構成力もよく「ふるさと大賞」に値する作品になっています。

(講評／八木 隆氏)



中村 秀藏さん
(勝山市)

ふるさと大賞 写真コンテスト

平成10年度より郷土福井の自然、歴史、文化等の地域資源を題材とした「ふるさと大賞」写真コンテストを開催事業を行っています。第13回目となる22年度は、403点の応募がありました。審査の結果、59点の入賞作品（別表のとおり）が選ばされました。



長谷川礼子さん(鯖江市)

一般の部「大ベテラン」



清水 照夫さん(福井市)
一般の部「宴」

みこし担ぎの若衆をねぎらうのは、長老と夫婦でしょう。どんな会話か交わされたのか、一杯入って威勢のいい笑顔がはじけ、見る者も元気になるような作品です。むしろに座り、卓箱につめられた昔ながらの祭り料理をいただく。このような宴が、人々のつながりを深めていくのでしょう。画面手前の卓箱から中央奥のご夫婦へとストーリーが展開する見事な構成です。

老眼鏡をかけ、黙々と縄を編むおばあちゃん。おそらく何年にも亘って同じ作業を続けてきたのでしょうか。その手や顔からは長い時を刻んだ熟練の味わいがうかがえます。南越前町今庄地区特産「つるし柿」の出荷に向けての仕上げの作業をしているところだそうです。帽子をかぶった頭や手前の柿などをすべて入れずにカットすることで、手や顔に目線が引き込まれます。ポイントを絞って無駄のないインパクトのある構図に仕上げています。

(講評／勝山景司氏)

(講評／水谷内津次氏)

ふるさと賞

審査員

審査委員長
八木 隆（写真家）
審査委員
竹澤 勝山 野田 訓生
並木 加藤 真治
木内 健次
（写真家）
（株）福井新聞社編集局写真映像部長
（福井県立美術館学芸員）
（財団法人げんぶんふれあい福井財團理事長）
（日本原子力発電係理事・敦賀地区本部業務・立地部長）

作品展示会場

これらの作品を多くの方に御覧いただきために、県内の会場で作品展示会を開きました。

敦賀会場

げんぶんふれあいギャラリー

2月1日火～2月13日水

福井会場

ショッピングセンター「ベル」

2月18日金～2月23日水



笠松 篠さん（越前町）
学生の部「もくもく」

ふるさと賞

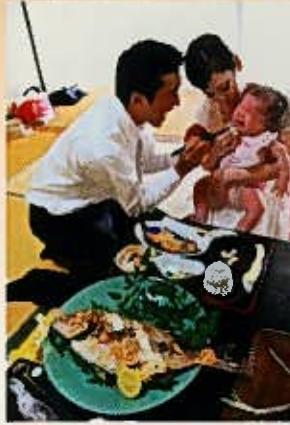
優秀賞



前田由加里さん（福井市）



岡田 慶一さん（あわら市）



柄島 昌子さん（敦賀市）

一般の部「皆でワイワイソーメン流し」

割った竹の中を、冷たい水と一緒に流れてくるそうめん。でっそりとすくい「やったー」と言わんばかりの女の子や、待ちかまえる子どもたちの笑顔は見るものを引きつけます。

子供たちの目線に合わせて、生き生きとした表情をしっかりと撮っているのがとてもいいです。撮られていることなど眼中になく、夢中でそうめん流しを楽しむ元気な子供たち。夏の暑さを吹き飛ばすような笑い声や歓声が聞こえてくるようです。

（講評／勝山 章司氏）

一般の部「食べごろ」

背景に鮎つりをする人と陽光にきらめく川面。河原で焚火にあぶられる鮎からは、まさしく採れたてのおいしさが伝わってきます。串にさされてはいるものの、様々な方向に向きをとり、まだ薄黄色が残るひれで泳ぎ回っているかのようです。豊かな自然の恵みが嬉しい1枚。點の画面へのとり入れ方が大胆で、ぐっと目をひきます。

（講評／水谷内健次氏）

一般の部「お食い初め」

「お食い初め」でのワンショット。一生食べ物に困らないように、というご両親の願いがとてもよく伝わってきます。笑顔いっぱい赤ちゃんと箸に向けるお父さん、わけがわからずむすかる赤ちゃん、それをやさしくあやす母さん。赤ちゃんとご両親の声が聞こえてくるようで、微笑ましい場面をとどめました。

手前に大きく写っている尾崎付きの見事な鱗じ、この場面には大変効果的に雰囲気を盛り上げており、全体にまとまった構図になっている作品です。

（講評／竹澤 俊夫氏）

入賞作品一覧（敬称略）

佳作		入選		優秀賞	
一般	一般	一般	一般	一般	一般
秋の古り	おかりり	北	北	高田 正年（小浜市）	中村 秀喜（鷹居町）
秋の古り	おひこり	東	東	高見 隆治（鷹江町）	大ベテラン
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	新井 一礼子（鷹江町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	清水 信夫（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	笠松 篠さん（越前町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	豆松 伸（越前町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	納瀬 透（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	坂井 康子（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	西山 さく（鷹江町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	松村 美子（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	坂井 康子（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	茂妻 雅子（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	原野 正弘（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	寺屋香代子（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	東	東	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	西	西	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り	ほのぼのと	南	南	高見 隆治（鷹江町）	高見 隆治（鷹居町）
秋の古り</					

ふくいの
伝統行事

国選択無形民俗文化財

「日向の水中綱引き」

美浜町

神話の里・日向

新聞記者やマス「ミ」が好んで使う、「奇祭」や「ト祭り」（トンテモナイマツリの略）というセンセーショナルで安直な物言いには何かしら違和感があります。とはいって、厳寒の運河に飛び込んで、東西に分かれて藁綱を引き合つ、勇壮な漁民の男意氣がはじける大漁祈願の真冬の年中行事、美浜町日向の「水中綱引き」には心底驚かれ、見学するたびに深い感動を禁じ得ません。

時折、晴れ間のがぞくものの、ひと間ひと間吹雪が舞う小正月の翌日、1月16日の午後2時より、今年も毎年恒例の水中綱引きが日向の運河で無事開催され、あらためて海人族の末裔のほこらかな海への熱いまなざしを強く感じたことでした。日向はほぼ純漁村の漁業集落で、往古、南九州の日向の國から移住してきたと伝えられています。若狭町気山に鎮座する古社、春祭りの王の舞の奉納で有名な宇波西神社はもともとは日向の清浄の森に元宮があり、後世に現在地に移転したもの。神代の昔（神話の時代）に日向湖に鶴戸神宮（日南市）の神ウガヤフキアエズノミコトが影向され、湖底から漁夫が拾い上げた神剣が、春祭りに元庄屋の渡辺家の当主によって神前で祭事の間両手

を高く掲げて奉持されます。

卯詣りと綱引きの奉納神事



日向区稻荷神社

伊勢音頭を歌い終え、りりしく色とりどりの縮緬の鉢巻きを締め、晒し腹巻きにパンツ一貫の出で立ちで青年会長を先頭に若い衆がつきつけと長床から村通りへと声援をあげて飛び出していく様子。

今年は悪天候のため、さすがに観光客や見物人も少なく、また、例年なら日向橋の欄干に多数の華やかな大漁旗が吊りますが、強風のため今年は中央にわずか一本のみ。欄干から決起盛んな若者や、厄年の村びとが勇壮な掛け声とともに次つぎと運河に飛び入ります。



水中で綱を切る若者

敦賀市西町の夷大黒の綱引きをはじめ、各地の綱引きは両者の勝ち負けにようてその年の運勢や豊作・豊漁を占いますが、当地の綱引きには年占の要素はありません。元来は東西に分かれることから当然予祝儀礼（年頭の生業の豊産を祈る儀礼）であり、決して余興や見せ物ではなく本来は嚴格な神事で

け声とともに次つぎと運河に飛び入ります。怒濤が波止場の護岸を超えて、打ち寄せる逆波でふくらむほどの運河で、東所と西所の両岸に張り渡された太綱が力強く引き合われ、泳ぎながら綱を手や口で噛み切る若者たち。周囲から熱い声援が飛び交い、やがて10分ばかりで綱が切れ、観客の拍手喝采のどよめきのなか、海へと流れていきます。海水は比較的に暖かいものの、引き潮になると日向湖の水が海へと流れ、そのため、寒暖の差があり、寒中の運河の水はまさしく身を切るほどに冷たい。水中で絶えず両足を動かしていないと感覚が麻痺するほどだといいます。

敦賀市西町の夷大黒の綱引きをはじめ、各地の綱引きは両者の勝ち負けにようてその年の運勢や豊作・豊漁を占いますが、当地の綱引きには年占の要素はありません。元来は東西に分かれることから当然予祝儀礼（年頭の生業の豊産を祈る儀礼）であり、決して余興や見せ物ではなく本来は厳格な神事で

当区の氏神は稻荷神社で、午前中長床に若い衆が集まり、伊勢音頭を銘々が歌い合い、威勢よく基綱を縋り上げられ、長さ40メートル、太さ30センチメートルの大綱が運河に張り巡らされます。この間、午前10時から宇波西神社で初卯参りが行われ、海上安全と大漁を祈願。その後、「卯詣り」と染め抜いた赤旗が稻荷神社に納められると、いよいよ水中綱引きが始まります。



日向橋から飛びこむ若者

由来と歴史

近年、水中綱引きの起源について、寛永12年（1635年）の小浜藩主酒井忠勝による運河開削を記念して始められたなどと新説が提唱されていますが、これはあくまでも「日向村庄屋日記」（渡辺八郎衛門家所蔵）の記事をもとに考証した仮説であり、しかも綱引きそのものへの言及があるわけではありませんから、単なる憶測にすぎません。日本人はともすれば文書の記録がないと満足せず、史料偏重のきらいがあり、みずから民衆が伝えてきた伝承を軽視する傾向がみられます。



伝統行事を見学する観客

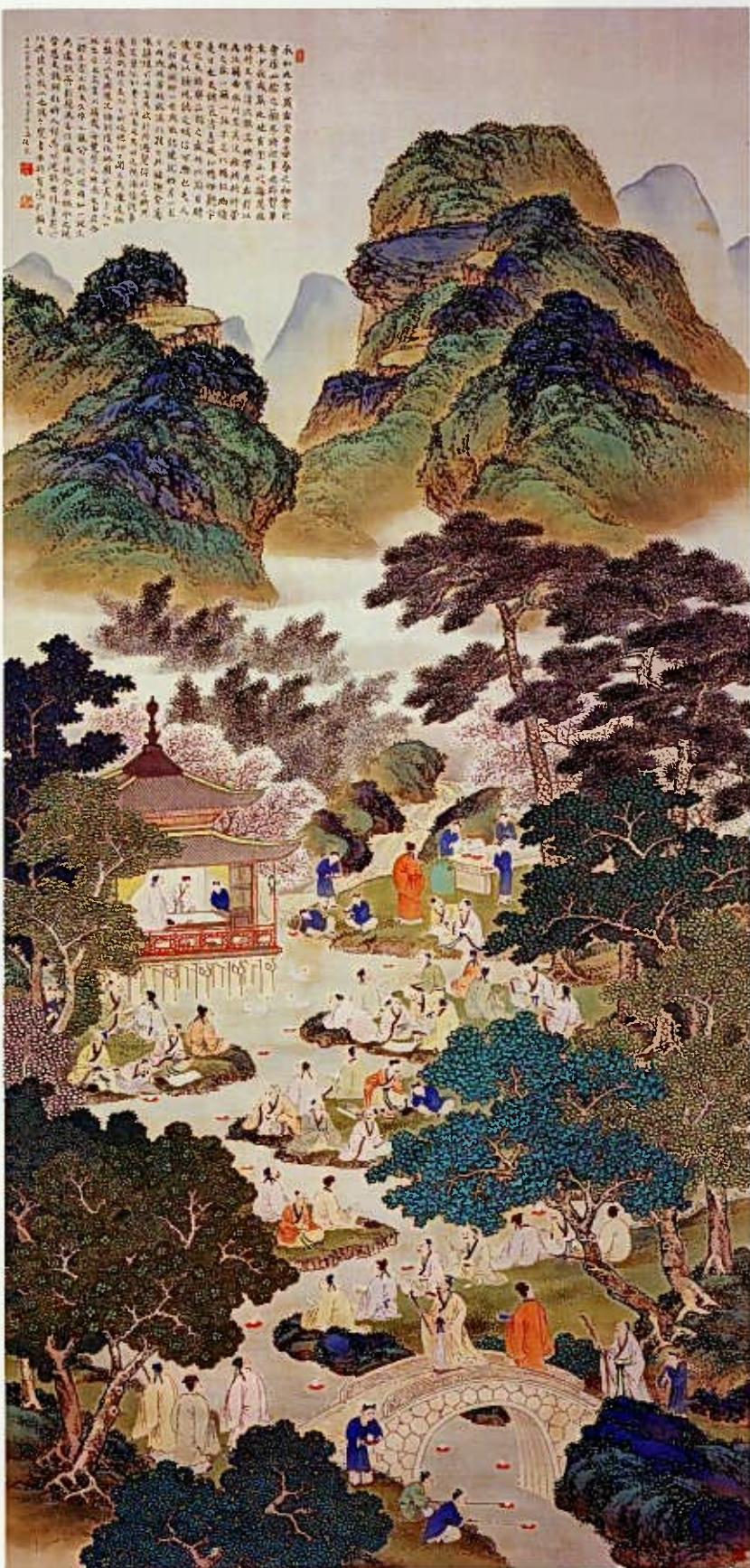
当地的伝説によれば、ある年大蛇が現れ、さまざま災厄をもたらしたため、悪蛇退治の様子を再現し、大漁と村内安全を祈願したのが由来とされています。若狭には藁綱を村境に吊す勧請綱や大綱引きの正月行事が各地にわたり、古い民俗信仰の伝統があります。

始されたわけではなく、以前から旧河口でも行っていた決して開けておらず、これまでのところは開けていません。決して藩主によつて開かれています。

太綱が切れるときには、岸に上がり、家族に迎えられ白米と五円硬貨入りの一升枡を持つて神社に参拝しいつたんめいめい家路につく。風呂につかり冷えた体を温めた後、神社の長床で日向の女性と結婚した家から届けられた婿酒を飲んで綱引きの慰労会を行います。

蘭亭曲水図 一幅

内海吉堂 筆



本図は、中国東晋時代の政治家・謝安が、文人たちと蘭亭の庭園の川辺に酒杯を流し、上流から流れてくるまでに詩歌を詠つたという「曲水の宴」の故事を描いています。その起源は桃花水（桃の花びらを流した川の水）を飲んで禊をし、穢れを祓うという古代中國の行事から興つたもので、初めは上巳（三月初めの巳の日）に行われていました。やがて日本に伝

わり、三月三日が桃の節句とされるようになります。宮中では現在も年中行事の一つとして続けられているほどです。

画面に目を移すと、蘭亭には詩歌を詠み、酒宴に興じる文人達の様子が活写されています。また、画面に施された群青、緑青、紺青の岩絵具は、華やかな宴の席を一層鮮やかな雰囲気にしています。

筆者の内海吉堂は嘉永2年（1849）に敦賀に出生。名は復、字は休郷。幼少の頃、近江湖東の医師・小菅元峯に就いて漢学を学び、画を四条派の塩川文麟に師事しました。明治10年（1877）から約6年中國に遊学し、古画や詩文を研鑽。明治19年（1876）には京都開催の青年絵画研究会の審査員となり、以降は明治40年に開催された文展などで、たびたび

受賞を重ねました。大正12年（1923）74歳没。

□ 編本着色
□ 縦184.0×横87.8cm

□ 賛 王羲之の「蘭亭記」を吉堂自賛

□ 落款 「大正二年癸丑之桂秋
吉堂居士海復寫」

□ 印章 「南越内海復章」白文方印

福井の文学碑

山の文学者 深田久弥

「日本百名山」で登山ブーム起こす

（城尊し 古き城 更に尊し）

坂井市丸岡町霞町一丁目 城のまち
会館の玄関前広場（駐車場）南側に
「日本百名山」の著者として有名な山
岳文学者であり、俳人でもあつた深田
久弥の句碑があります。この城のまち
会館は、城下町丸岡の中心部にあり、東側の
すぐ近くに現在日本最古の天守をいただく丸
岡城が見えます。城のまち会館は丸岡公民館とし
て親しまれてきましたが平成14年（2
002年）に、丸岡地区コミュニティセ
ンターとして建築され、周囲の景観に
マッチした木造2階建てに一新されました。昭和41年（1966年）4月、地
域文化団体丸岡五徳会が中心になつて、町教育委員会と連携して、丸岡成
人大学を発足。この公民館で月一回の
ペースで、年10回ずつ講座を開催して
きました。文化関係では、丸岡町一本
田出身の文学者、中野重治はじめ同町
にゆかりのある作家、開高健ら著名人



深田久弥 句碑

が続々、講師として招かれました。深
田もその一人で、昭和45年（1970年）
5月の成人大学で講演しました。その
時、丸岡城の風景にとても感銘したら
しく、城への敬愛の念が込められた一
句を詠みました。平成7年（1995年）
6月、丸岡成人大学が創立30周年を迎
えたのを記念し、丸岡五徳会が、黒御
影石にこの一句を刻み、建立したもの
です。

中学時代から登山に熱中

深田は明治36年（1903年）3月11
日、お隣の石川県江添郡大聖寺町中野

（現 加賀市大聖寺中町）で父、弥一、母
トメの長男として生まれました。家業
が紙商で、印刷業を兼ねており、現在
も老舗として営業が続けられています。
少年時代を過ごした故郷について
「僕の町からは白山がよく見える。僕
の心に山への憧れる芽を植えつけたの
はこの白山かもしれない。冬の晴れ間
に白山が白銀に輝いているのを打ち眺
めると、ああ美しいと思った」（わが
山々）と書いています。大聖寺は白山

歩き読み書いた生涯

当時の大聖寺には大聖寺学生会が組
織されていました。その先輩に誘わ
れて、県境の山富士写ヶ岳（942m）
に登ったのをきっかけに、山登りを始
め、中学二年生の時、初めて白山に登つ
ています。勝山から谷峰を越え、白峰
村で一泊、翌日、室堂で泊まり、頂上
を踏んだ。「日本百名山」の中で、中
学時代の白山登山が「私の山岳開眼」
と記しています。福井中学を経て、第

の実家が福井市の酒屋で、姉も勝山の
呉服屋に嫁いでいます。大聖寺には旧
制中学がなかったので、中学校への進
学は、金沢、小松か、福井へ。大正5
年（1916年）4月、深田は小学校の
高等科一年修了後、旧制福井中学に入
学。同級生には森山啓（作家）、石田和
外（最高裁長官）、一年生には吉田正俊（歌
人）、二年生には中野重治、皆吉爽雨（俳
人）、そして四年生には高田博厚（彫刻家）
らがいました。人材を輩出しに囲まれた福井城跡にありました。こ
こでも白山が美しく眺められ、深田は
白山への憧れが一層、強まりました。
た当時の福井中学は濠（ほり）と石垣
に囲まれた福井城跡にありました。こ
の山として



深田久弥
山のまち会館より



の山として
荒島岳（15
23m）を紹
介しています。
の山として
勝山（15
704m）頂上近くで倒れ、脳卒中で急
逝しました。享年68歳。歩き、読み、
書いた、生涯でした。加賀市大聖寺
番場町に「深田久弥山の文化館」が開
設されています。



代表作「日本百名山」
年（1971
3月21日午後、山梨県の茅ヶ岳（1
704m）頂上近くで倒れ、脳卒中で急
逝しました。享年68歳。歩き、読み、
書いた、生涯でした。加賀市大聖寺
番場町に「深田久弥山の文化館」が開
設されています。

一高等学校へ進学、ここで中野重治ら
が中心の同人誌「裸像」に参加。東京
帝國大学文学部哲学科へ入学し、福田
清人らと「新思潮」を刊行、横光利一、
川端康成に認められ、文学活動にまい
進していきます。昭和5年（1930年）
に「オロツコの娘」を発表し、文壇に
デビュー。東京帝大を中退、翌年、金
沢第七連隊に入隊。そして除隊後、山
岳紀行文「わが山山」、引き続き「津
軽の野づら」「あすなろう」など小説
を作り、小林秀雄らと昭和8年に「文
学界」を創刊しています。戦前は、鎌
倉文化人として活躍。文壇山岳部、
を作り、小林秀雄らと文学者を登山に
案内したり、昭和16年（1941年）か
ら俳句会に参加。「きゅうさん」とい
う愛称から「九山」と俳号をつけて句
作にも打ち込みます。昭和19年に応
召し、歩兵小隊長（陸軍少尉）として中
国、湖南省を転戦。終戦後復員し、志
げ子夫人ら家族が疎開した越後湯沢を
経て、大聖寺、金沢に10年余り滞在
し、地方文学の振興にも貢献しています。
半分福井県人であること自認し、
「日本百名山」（昭和38年発表）に福井県
に登ったのをきっかけに、山登りを始
め、中学二年生の時、初めて白山に登つ
ています。勝山から谷峰を越え、白峰
村で一泊、翌日、室堂で泊まり、頂上
を踏んだ。「日本百名山」の中で、中
学時代の白山登山が「私の山岳開眼」
と記しています。福井中学を経て、第

福井の民俗文化

暮らしの
古典

敦賀市山 稲荷神社の初午祭り

シリーズ 4



水垢離をするゴクカキ

敦賀市山区の氏神稻荷神社の例祭は、毎年旧暦2月初午の日に行なわれてきたため（現在は初午の日に近い日曜日に行われます）初午祭りと称しています。この祭りは古い時代の神祭りの姿を伝える儀礼をともなっており、敦賀市の無形民俗文化財に指定されています。

かつては「ゴク（御供）祭り」とも呼ばれていたとおり、この祭りの中心はゴクと称するお供えを神社に奉納するところになります。初午祭りのゴクは、糯米に黒豆を混ぜて蒸したもので、ゴクを担いで運ぶ役割の男衆8人をゴクカキといいますが、ゴクカキは前日から社務所に泊り込み、早朝6時

半、神社脇の水路で水垢離（みずけり）します。昔は美浜町佐田の浜で潮垢離を行つていたと伝えられています。神聖な神へのお供えを扱う者には厳重な精進潔斎

が求められます。

その後ゴクカキは、紐の法被と股引、白足袋、赤ハチマキに緑のしごき帯と

いつた服装に着替え、7時になると、鳥居の前でヒトミゴク（人身御供）と

コシモト（腰元）を迎えます。ヒトミ

ゴクとは小学校低学年までの女の子で、コシモトはその付添役の婦人です。ゴ

ク一盛とワラビや昆布巻、御神酒、塩

などのお供えを入れた樽円形の曲物に麻布をかぶせたものをゴクカキ4人が持つ、その下をヒトミゴクとコシモト

が歩き本殿へ向かいます。ゴクカキの残り4人は、2人ずつがこの前と後ろにつき、神主や、二十人衆と呼ばれる長老衆たちも行列に加わります。

本誌第36号で紹介された敦賀市刀根のヒツノフタや、脅見のヒルモチ、美浜町の弥美神社のジョロー、若狭町田井のミコリカキ、向笠のミゴカキなど、童女がお供え物の下を歩くなどして行列に加わる例は、嶺南地方の祭りによく見られます。こうした例は県外各地でも、中世から続くような古い祭りが多く見られ、神へのお供えを奉納する

際に、穢れなき童女が重要な役割を果たしていたことを表すものと考えられています。

ところで行列の出発前、興味深い儀礼が石鳥居の前で行われます。ヒトミゴクは鳥居前に据えられた太鼓の上で打掛けと綿帽子を着せられるのです。このとき太鼓の上で衣装を着けるのは、ヒトミゴクが俗人から神聖なものへと変身することを意味するものと考えられます。美浜町の弥美神社の王の舞でも、王の舞は太鼓に腰かけて冠や面などを着けられます。なおヒトミゴクは、以前はこの打掛けや綿帽子を着たまま本殿へ向かいましたが、かなり古くいため、現在はすぐに脱いで、もとの晴着姿で歩いています。

本殿での神事が終わり神前から下げられたゴクは、別に用意された、同じ糯米と黒豆を蒸したものに混ぜられ、大きな飯櫃2つに入れられます。



本殿に向かうヒトミゴクとゴクカキ

格を有する限られた者たちが一坐して祭りを行つ組織を一般に宮座といいます。山区の初午祭りは、二十人衆を頂点とした年齢階梯的な宮座組織によって運営されていることも特色のひとつです。

（若狭路文化研究会 堀東敏博）



公会堂での盃の儀式

これに薦をかけてゴクカキ4人ずつが抱き、拝殿へ走り込みます。すると境内に集まっていた人々が、これを先を争つて奪うようにして貴つて帰ります。この後、8時半頃から山区公会堂に一堂が座して盃の儀式が行なわれます。これに参加するのは、ヒトミゴクとコシモト以外はすべてモロト（諸人）と呼ばれる男衆に限られます。モロトは、区内に生まれた長男あるいは養子、婿養子など将来戸主になる男子で、ヨボシギ（鳥帽子着）という儀式を受けた者だけが加わることができます。ヨボシギを受けると「諸人座舗並之帳」という名簿に記名され、その記名順での最長老が一老で、以下20人が二十人衆となります。二十人衆は、祭りには鳥帽子直垂を着て参加し、公会堂での盃の儀式では上席に居並びます。一定の資本で、

予算総額（一般会計）9,069万円

23年度予算は、総額（一般会計）9,069万円とし、重点施策を焦点に予算配分を行い、事業費総額7,545万円を計上。財団寄付行為で規定している事業区分の内訳は次のとおりです。

1. 地域文化の振興事業 2,030万円
2. ふれあい・ゆとりの創造事業 990万円
3. 芸術鑑賞機会の提供 文化創造事業 3,300万円
4. 優れた文化活動に対する顕彰事業 700万円
5. その他の事業 (ホームページ、広報誌の発行など) 525万円

6 重点施策

1. 文化団体等の活動を支援する助成事業の充実
2. ふくい県民総合文化祭および県内高等学校文化部活動の支援
3. 地域に根ざしたふれあい活動の推進
4. 文化、芸術を愛する県民風土を高める顕彰事業の定着化
5. 魅力ある文化イベント提供事業の推進
6. 信頼される財団として広報・広聴活動の展開

平成23年度 財団事業計画・予算を決定

文化の育成支援など 6 重点施策を推進



平成23年度事業計画および予算を審議する第39回理事会

平成23年度における財団の事業計画と収支予算は、3月10日に開催した第40回評議員会と第39回理事会で可決

本方針として中・長期的視点にたち、福井県における新しい時代に対応した文化の指針である「教育・文化ふくい創造会議」の提言を踏まえ、財団としては、これまで培ってきた実績を生かし、県、市町、県内文化団体との連携を密にし、地域に根ざした信頼される財団として、次の6重点施策からなる事業計画と予算を編成しました。

承認されました。

第13回ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品展

“ふるさとの味わい・ふくいの食”をテーマに

第13回ふるさと大賞写真コンテスト（当財団主催）の入賞作品展を2月1日から2月13日まで、げんてんふれあいギャラリー（敦賀市）で、2月18日から2月23日までショッピングシティ「ベル」（福井市）の2会場で開催しました。会場には応募作品403点の中から選ばれた、ふるさと大賞1点、ふるさと優秀賞3点はじめ59点の作品を展示了。コンテスト審査委員長の八木隆さんは、「今



「ふるさと大賞」に見入る人たち
(げんてんふれあいギャラリー・敦賀市)



「ふるさとの味わい・ふくいの食」を鑑賞するファン(ショッピングシティ「ベル」福井市)

テーマにした課題は少しずつしかつたかと考えましたが、越前ガニ、ソバ、アユ等「ふくいの食」が全般に出品され好感がもてました。デジタル技術に頼る事なく画面構成、シャッターチャンス、光線状態、色調等、写真的基本を大切にした撮影をしました。今後とも目指して下さい」と総評されました。両会場には写真爱好者らが多く訪れた。「ふくいの食」の作品に見入っていました。

第75回福井県かきぞめ競書大会

げんてんふれあい福井財団特別協賛



木田小学校での席上揮こう(福井新聞社提供)

が寄せられ、第一次審査を通過した25人が、1月29日原下12会場で席上揮きに臨みました。会場の一つ福井市木田小学校では、小学生261人が当日発表された学年ごとの課題「大木」「体力向上」などを制限時間いっぱいを使い書き上げました。

第75回県かきぞめ競書大会（福井新聞社主催、当財団特別協賛）に、若越書道会共催、別協賛）に、県内の小、中、高、大学生から7万588点の応募作品が寄せられ、第一次審査を通過した25人が、1月29日原下12会場で席上揮きに臨みました。会場の一つ福井市木田小学校では、小学生261人が当日発表された学年ごとの課題「大木」「体力向上」などを制限時間いっぱいを使い書き上げました。

新規に、小・中学生の推薦作品の中から、くり本大先生（春山小）ほか10人に「げんてんふれあい福井財団賞」を贈りました。



表彰式で財団賞を受ける受賞者
(福井新聞社・風の森ホール)

第75回県かきぞめ競書大会

席上揮こうの審査は翌30日若越書道会の会員により慎重に行われ、審査の結果、最優秀の大賞に岩佐白南子さん（春山小）、網谷有佳子さん（明倫中）、井上亞由美さん（高志高）、中川尚子さん（福井大）の4人が選ばれ、また推せん14点、準推せん221点、奨励賞27点が決まりました。表彰式は2月13日、福井新聞社・風の森ホールで行われ、財団で

ふくいふるさと祭り

第37回福井県民俗芸能大会

第4回「ふくいふるさと祭り」が11月14日、おおい町総合運動公園体育館で開催されました。この祭りは福井県の民俗芸能の普及・継承、発展を目的に毎年福井県が開催しています。



下村の獅子舞（おおい町）

今回の出演は「本郷踊」（おおい町）「下村の獅子舞」（おおい町）「日向神楽」（坂井市）「シテナ踊」（若狭町）の県指定無形民俗文化財の芸能のほか、地元芸能として「スーパー大火勢」で活躍する和太鼓の「大飯ブレイズ」が勇壮なパチさばきを披露しました。普段は各地の祭礼等でしか見る事のできない、地域色豊かな民俗芸能が一度に多く見られる事もあって、来場した観客は各地の伝統芸能を鑑賞しました。

「ふるさとの祭り」として開催。

平成19年度より

「ふるさとの祭り」として開催。

昭和45年から

福井県民俗芸能大会が開催され

てきましたが、

各地の創作芸能も加わり、地域の伝統芸能が一同に会し発表さ

れました。この祭りは、福井県の民俗芸能の普及・継承、発展を目的に毎年福井県が開催しています。

れる重要な場となっています。

今回の出演は「本郷踊」（お

おい町）「下村の獅子舞」（おおい町）

「日向神楽」（坂井市）

「シテナ踊」（若狭町）

の県指定無形民俗文化

財の芸能のほか、地元

芸能として「スーパー

大火勢」で活躍してい

る和太鼓の「大飯ブレ

イズ」が勇壮なパチ

さばきを披露しました。

普段は各地の祭礼等で

しか見る事のできない、

地域色豊かな民俗芸能が一度に多く見られる事もあって、来場した

観客は各地の伝統芸能を鑑賞しました。

日本古来の伝統芸能に親しんでいたため、財団では11月4日、敦賀市プラザ萬象で観世流能役者の味方玄さんはじめ能樂師らを招き「能を楽しむ会」を開催しました。当田、昼夜の部では敦賀市内の中学生（栗野・角鹿・氣比付属）約420人が体験学習の一環として能を鑑賞しました。公演に先立ち、味方玄さんから能の歴史や、能の楽しみ方について基本的な説明を受け、さらに

小浜市連合婦人会「婦人のつどい」

辛坊治郎氏「テレビでは聞けないニュースの裏側」

小浜市連合婦人会主催（当財団共催）の平成22年度「婦人のつどい」が平成23年2月6日（日）小浜市文化会館で多彩な内容で盛大に開催されました。一人ひとりが力をあわせ、活気ある地域を目指し取り組んでいる同婦人会の恒例アトラクションでは、応援出演の若狭町婦人会のダンスのほか市内8区の婦人会が、踊り、寸劇、フランダンスなどに子供達も参加し、元気いっぱいのステージを繰り広げました。会場は大きく盛り上がり盛大な拍手が送られました。その後の記念講演ではテレビ等で活躍している辛坊治郎さんが「テレビでは聞けない



「眞実を読み解く力を持つてほしい」と語る辛坊治郎さん

第11回 日英小学生絵画交流展

「私たちのくらし」をテーマに

第11回日英小学生絵画交流展を当財団と一社（英NS）（英国国際原子力サービス会社）共催、日本原電（協賛）が、12月4日から12日まで敦賀原子力館、12月14日から26日までげんでんふれあいギャラリー（敦賀市本町2丁目）で開きました。

交流展は11月から2月までイギリス、敦賀市、東海村と順次開催。



日英小学生絵画交流展（敦賀原子力館）

作品展には敦賀市の5小学校（敦賀西・南・北・東浦・咸新）から42点、茨城県東海村の6小学校から35点、英國、西カンブリア地方、セラフィールド近郊の7小学校から71点が出展されました。「私たちのくらし」をテーマに描かれた作品は、風景、動物、運動会などの絵で、会場を訪れた人達は、両国のお国柄が出たみずみずしい感性あふれる作品をじっくり鑑賞していました。



イギリスでの絵画交流展（資料INS）

第13回 能を楽しむ会

伝統芸能を堪能

日本古来の伝統芸能に親しんでいたため、財団では11月4日、敦賀市プラザ萬象で観世流能役者の味方玄さんはじめ能樂師らを招き「能を楽しむ会」を開催しました。当田、昼夜の部では敦賀市内の中学生（栗野・角鹿・氣比付属）約420人が体験学習の一環として能を鑑賞しました。公演に先立ち、味方玄さんから能の歴史や、能の楽しみ方について基本的な説明を受け、さらに



味方 玄さん演じる「紅葉狩」

日本古来の伝統芸能に親しんでいたため、財団では11月4日、敦賀市プラザ萬象で観世流能役者の味方玄さんはじめ能樂師らを招き「能を楽しむ会」を開催しました。当田、昼夜の部では敦賀市内の中学生（栗野・角鹿・氣比付属）約420人が体験学習の一環として能を鑑賞しました。公演に先立ち、味方玄さんから能の歴史や、能の楽しみ方について基本的な説明を受け、さらに

受け、さらに

受け、生徒たちは能役者による独創的な所作による演技を見入り、伝統ある能を楽しんでいました。夜の部は、約300人の熱心な一般ファンが集まり、味方健さんからの演目の解説を聞いた後、「紅葉狩」が演ぜられ、観客は日本の伝統芸能をじっくり堪能していました。

財団ふれあい通信

平成23年度 財団の助成を受けたい団体を募集 申請期限4月20日(水)

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて助成をしています。平成23年度において文化活動等の事業を行うため、財団の助成を受けたい団体を募集しています。

対象団体の要件

1. 福井県内に活動の本拠を置く団体
2. 構成員（会員）が原則として20名以上の団体
3. 平成23年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
4. 営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
5. 特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

応募の方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を平成23年4月20日(水)まで（申請事業の実施が4・5・6月の場合は3月20日(日)まで）に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは「げんてんふれあい福井財団」にお問合せ下さい。

読者アンケートご回答のまとめ

げんてんふれあい福井 第37号

本誌第37号（平成22年7月発行）のアンケートに総数23通のご回答をいただきありがとうございました。その結果を下表のとおりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願いいたします。



第37号で良かった記事

- | | |
|----------------------------------|-----|
| ○教育・文化ふくい創造会議
(第三次提言) | 5名 |
| ○「白川文学賞」と福井(中) | 6名 |
| ○ふるさと福井・人物シリーズ
「食育の祖 石塚左玄(三)」 | 9名 |
| ○第13回風花隨筆文学賞
財団受賞作品紹介 | 7名 |
| ○ふくいの伝統行事シリーズ
「沓見のお田植え祭り」 | 11名 |
| ○敦賀市博物館上ギャラリー／31 | 2名 |
| ○福井の文学碑「俳人 尾崎放哉」 | 7名 |
| ○福井の民俗文化シリーズ2
「福井の虫送り」 | 9名 |
| ○情報ファイル | 3名 |

本誌へのご意見・ご要望

- 教育・文化ふくい創造会議は地元文化の育成と参加の提案が出された事、うれしく読ませていただいた。
- 石塚左玄は大変勉強になりました。学級懇談会で話題として取り上げたいと思う。
- 風花隨筆文学賞の受賞作品は、心が温まると思いました。ふる里の人たちの心のつながりがすばらしい。
- 福井の文学碑・民俗文化シリーズは大変興味深く拝読しました。取材が丁寧でわかりやすい。
- 福井の歴史・文化を大切に守り育てていこうという気持ちが伝わってきます。
- 文学・絵画・民俗文化等幅広く広報されていて、とても楽しい。
- 表紙を含め、本誌は福井を知る貴重な郷土資料といえる。
- 助成事業は、文化団体にとっては貴重な財源補助であり、文化振興の拡大につながる支援である。

財団イベント INFORMATION

トスティの贈り物2011	春を彩る3人のテノールによるコンサート	4/13水	福井市 福井新聞社 風の森ホール	福井新聞社主催 財団協賛 入場料3,000円
文化講演会	講師 宮川泰夫 (元NHKアナウンサー)	5/7土	敦賀市西公民館	敦賀市連合婦人会と財団共催
げんてんふれあいコンサート2011	杏里	5/22日	福井フェニックスプラザ 大ホール	財団主催 2,000円(全席指定)
文化講演会	講師 大棟耕介 (道化師)	7/3日	福井市 福井県生活学習館	福井県連合婦人会と財団主催

